

朗 読 文

競馬、というとすぐにギャンブル。たちまち顔をそむけてしまう人がまだまだ多いだけでも、最近の競馬ブームが急増する若い女性ファンによって支えられていることも事実である。

競馬を愛する若い女性たち。もちろんレース結果への興味もさることながら、多くの場合は競走馬であるサラブレッドそのものへの憧憬が強い。

サラブレッドは、俗に「走る芸術品」と言われる。その通り、サラブレッドは人間が何代もの間に品種改良を重ねて創り出したもの。より速く走るための機能を備えた馬のことを言う。そのためサラブレッドの四肢は、無駄な肉は削ぎ落とされて非常に細いのが特徴だ。人はサラブレッドの脚を称してガラスの脚と呼ぶ。

もともと臆病な性格の野生馬たちは、集団生活を強いられてきた。その性格を利用して、品種改良が行われたという。つまり、追いつがる野獣からいかに助かるか。そのためにはより速く走らなければならないという習性が、実は優れたサラブレッドを創り出してきた。人間の手によって創造されたために、現在活躍しているサラブレッドたちは、その血筋を辿っていくとわずか三頭の馬に行き着く。血筋のことを血統といい、全ての馬が父や母、そのまた父や母の性格を色濃く受け継いでいる。だから、父や母の名を知ることによって、目の前にいるサラブレッドの癖や、レースへの適性などを理解することができる。血統を辿っていく作業は、まさに推理小説を読み切っていくようなスリルを味わうことができる。競馬が知的なゲームであると評される由縁である。

江戸末期、開港直後の横浜には、いち早く競馬場が作られた。日本で最初の本格的な洋式競馬場は、一八六六年（慶応二年）に竣工された根岸競馬場（現在の根岸競馬記念公苑）と記録されている。ところが、これより五年前の一八六一年（文久元年）に、すでに競馬場が登場していたことを地元でもあまり知られていない。桜田門外で井伊直弼が暗殺された翌年、また生麦事件が起こる前の年、世の中騒然たる幕末まっ只中である。

直前に交わされた修好通商条約のもと、横浜に居留するイギリス人の要望に答えて幕府が土地を提供したと、「横浜市史稿」に記されている。そして翌一八六二年には、日本で初めての本格的な競馬が外国人の手によって施行されている。

五月一日と二日の両日、それぞれ七レースが行われたという記録は、「ウエスタン・バーバリアン・イン・ジャパン」という当時発行されていた居留地向けの新聞記事として現存している。このときレースに参加した馬は、ほとんどがチャイニーズ系や日本の馬と言われているが、この中に数頭のサラブレッドがいたと言われている。もし真実なら、日本で初めて走ったサラブレッドたちである。